

令和五年度 入学試験（一般 第一回）問題（国語）

一 次の文章を読んで、後の【1】～【5】に答えなさい。

歳末の町に出ると人が出盛つて、あわただしい気分である。今年の暮の東京は割合暖かでしのぎよかつたが、寒波のきた日は木枯らしが吹く。にぎやかな通りを歩くと、赤札の店や、クリスマスの飾りなどが目にについて、押し迫った感じがする。私はこういう町の表情が好きである。今年は不景気だといわれるだけに例年ほどの混雑はないが、ぜいたくな商品も飾り窓に並んでいて、その前を前かがみに急ぐ人の姿は師走を感じさせる。

毎年このころになると、ある雑誌社の受賞パーティがあつて、その会に出席すると、これで今年も終わるなど思う。受賞式の間椅子にかけていると、この一年のことが思われて、やれやれといった気持ちになる。悪いことに若い時のような□(ア)が少なくなつて、来年こそはなどと力まない。なるべく病氣にとりつかれないように、乏しい能力をせいぜい生かしたいと思うくらいである。

このパーティの日は、浅草の羽子板市に当たるので、帰りは友達と誘いあつて気が向けば浅草へ出かける。ある時は下町のどじょう屋へ行くこともあるし、ホテルのグリルへ集まつたりもする。また銀座へ買い物にゆくこともありますって、私のたのしみの一つになつていて。前もつて決めるわけではなく、その日の気分で居合わせた人たちが一緒になる。男性なら飲みにゆく時間であろう。

今年は二、三年ぶりに浅草の羽子板市をのぞいてみようということになつた。行きたいけれど原稿の締めきりで、と残念そうに帰つてゆく人もいる。人と人とが寄りあうと、私は別れたくない□(イ)で、きっとあとについてゆく。師走の町へまぎれると、買い物を持った人の姿に暮しの感じがあつて、親しめる。

浅草雷門には大提灯が下がつてゐる。子どものころ幾度くぐつたかわからないこの提灯を仰ぐと、あるメーカーの寄進したものらしく一部に名が記してある。商魂たくましいといわなければならない。雷門をくぐると仲見世はまばゆいほど明るく灯がともり、光の□(ア)になつて、両側の軒からまゆ玉が垂れている。下町らしい雰囲気である。

東京都がまだ小さくて、盛り場の少ないこの浅草は娯楽の中心の場所だったが、今は東京の至る所に繁華街が出来てしまつたから、浅草は場末になりつつある。今どき日本髪に飾るかんざしや、つるしの訪問着や人形焼の実演をしながら商つてゐる店は珍しい。あちこち見ながら歩いてみると、フィルムが逆さまにまわつて昔に還つてゆくようであった。

羽子板市は觀音様の境内にあって、小屋掛けの店々に羽子板が飾つてある。以前に比べると横通りの店が少なくなつたし、人の出も多いとはいえない。混む時はあとにも先にも動けないほどの混雑で連れとはぐれないために手をつないで歩いたし、羽子板店の呼び声も高かつたが、今年は歩いている間その声も聞かなかつた。大きな羽子板が売れた時、売り手と買い手がシャンシャンと手を□(ビ)のは景気のよいものだが、まだ蓋明けのせいかそれもない。

カブキ役者のふんした羽子板は、先ごろ亡くなつた團十郎のが一番多くて、助六などよく似てゐるからなつかしかつた。私は團十郎最員だったのによっぽど買おうかと思つたが、何千円も投じるのは大げさだし、羽子板を抱えて帰るのはやはり生きた相手にのぼせるほどでなければ、さまにならない。

觀音堂の参詣人もほどほどで、不況の風が感じられる。私たちはお賽錢をあげて拝んだが、お賽錢の金額にしては欲張りすぎる願いごとで、みんな良い仕事が出来ますようにと、はかない神頼みをしあつたらしい。羽子板は結局掌にのるほど小さいのを、入院中の友達にと買い求めた。「道成寺」も「め組の喧嘩」も本物そつくりの衣装を着た押し絵である。考えてみると正月も羽根をつく習慣がなくなつて、若い人はボーリングやスキーに行つてしまふから、羽子板も□(ウ)な飾りものにすぎなくなるのは当たり前であろう。

浅草をあとに上野から新宿へ出て、お正月の贈り物など物色し、夜食を摂って帰ると、女の忘年会は終わりである。パーティも羽子板市も終わつたことだし、残る幾日かは、障子を張つたり、白菜を洗つたり、ふだん無能な主婦の私は点数をかせがなければならぬ。

(芝木好子『羽子板市』)

- 【1】 空欄⑦に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問1 2 3】
- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 ①熱意 | 2 ②心意氣 | 3 ③志 | 4 ④氣負い | 5 ⑤意欲 |
| 2 ①氣質 | 3 ②性分 | 4 ③資質 | 5 ④性格 | 6 ⑤性質 |
| 3 ①牧歌的 | 2 ②鄉愁的 | 3 ③情緒的 | 4 ④追想的 | 5 ⑤懷古的 |

- 【2】 傍線部「光の」に続く(a)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- 【3】 傍線部「手を」に続く(b)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- 【4】 ①帶 ②襞 ③筋 ④綾 ⑤軸

- 【5】 ①つなぐ ②あわす ③しめる ④たたく ⑤むすぶ

- 【6】 作者・芝木好子の作品として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問5】

- 【7】 ①『青果の市』 ②『湯葉』 ③『雪舞い』 ④『夏の終り』 ⑤『隅田川暮色』

- 【5】 波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問7】

- ①忙しさにかまけておろそかになつてゐる家事などをこなし、主婦としても面白を保ちたい、という思い。
②一年間いろいろと支えてくれた家族に感謝しつつ、残された時間を静かに使いたい、という思い。
③家事などに時間を使えるよう、穏やかな年の瀬を迎えた幸運を大切にしなければ、という思い。
④作家と同時に主婦でもある、ということを再認識できる日々をきちんと過ごしたい、という思い。
⑤時間に比較的余裕のあるこの時期、たまつてゐる家事などを片付けておかなければ、という思い。

【6】**ガシン嘗胆**【解答欄は問⑧】
【7】**面従フクハイ**【解答欄は問⑨】
【8】**①臥薪 ②駕薪 ③牙薪 ④賀薪 ⑤我薪**
【9】**①伏肺 ②復配 ③腹背 ④覆廃 ⑤幅杯**
【10】**キュウタイ依然**【解答欄は問⑩】
【11】**一病ソクサイ**【解答欄は問⑪】
【12】**ユイガ独尊**【解答欄は問⑫】
【13】**①即際 ②旧替 ③旧待 ④旧態 ⑤旧怠**
【14】**①旧体 ②旧替 ③旧待 ④旧態 ⑤旧怠**
【15】**①結我 ②遺我 ③惟我 ④由我 ⑤唯我**

三次の【11】～【15】の作品の作者を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

- 【11】「秋来ぬと日にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」【解答欄は問⑬】
【12】「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」【解答欄は問⑭】
【13】①壬生忠見 ②大伴家持 ③藤原敏行 ④山部赤人 ⑤僧正遍昭
【14】①北原白秋 ②斎藤茂吉 ③正岡子規 ④若山牧水 ⑤与謝野鉄幹
【15】①服部嵐雪 ②与謝蕪村 ③松尾芭蕉 ④吉川五明 ⑤小林一茶
【16】①中村汀女 ②橋本多佳子 ③杉田久女 ④星野立子 ⑤二橋鷺女
【17】「暁をいたいて闇にある薔」【解答欄は問⑯】
【18】①阪井久良伎 ②村田周魚 ③井上剣花坊 ④川上日車 ⑤鶴彬

【6】**二次の【6】～【10】の四字熟語のなかで、カタカナで記された言葉の漢字として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。**

四 次の文章を読んで、後の【16】～【21】に答えなさい。

今ではあらゆる交通機関が発達したし、旅行をすることは最も手軽な愉しみとなつたが、それでも山国に育つて一度も海を見たことのない人も、いないとは言えないだろう。それはその人にとつて不幸なことだらうと私は考える。絵や写真というようなものがあるとしても、実際に海を見たことがなければ、恐らく人生の経験の中の大半な一部分が欠けていると言えはしないか。しかしま反対に、海辺に育ち、海を見るに馴れ切つて、最早新鮮な魅力を感じない人がいたら、それもまた不幸なことに違ひない。

夏になると海に行つて水泳をする人は沢山いる。水泳のためだけならプールへ行けば【ア】足りよう。しかしどうしても海でなければならない人もいる筈である。これが単に夏だけでなく、従つて水泳をするためでなく、海を見たいという欲求が猛然と起るとただそれだけのために、汽車に乗つて海岸に行くような人は、恐らく一種の【イ】のために海に憧れるのである。そういう詩的な本能が、誰の心のなかにも、こつそりと隠されている。日本やイギリスのような島国では、特に海に対する親しみが、生れながらに血液の中を流れていると言えようが、我が國の場合に、柳田国男の説くように、南方の海から我々の祖先がこの国に流れついたことの記憶が、無意識のうちにあるのかもしれない。海は遠いもの、遙かなもの、懐かしいもの、そして神秘なもの一つの象徴的な形である。私は海を思うたびに妣^{はは}の国という言葉を思い出す。妣という難しい字は死んだ母を意味するが、その言葉の指すところは母国というのとはいさざか違う。妣の国はここにはない遠い国であり、しかも我々の魂のなかに生き続けている懐かしい古里である。それは実在するものではないとしても、人は海を見るたびに、海の彼方にそれを思い描くのである。

私は海のほとりで生れたわけでも、また育つたわけでもない。しかし自分でも奇妙に思えるほど、海への想いに取り憑かれていて、それが私の文学的発想の大きな部分を占めていることを【ウ】わけにはいかない。私は若い頃詩を書いていたが、そこにはたびたび、私の想像のなかの海が描き出された。その頃、私はそんなに海を見ていたわけではないのに、海のイメージ^(ア)はメイジヨウシガたい憧れを伴つて、私の魂に巣くっていた。無限なもの、人間の力の及ばないものの、あらゆる汚濁^(イ)を洗いしづめるもの、——そしてまた不可知なもの、それはひょっとすると人間的な絶望とあまりにも隔りがあり、あまりにも大きすぎる故に、私を慰めてくれたのかもしれない。そして詩を書いていた頃、私は同時に「風土」という小説を構想していたが、その小説の人間的カットウの向う側に、いつでも海が、一種の【エ】のように横たわつていた。そして私はそれ以来、海を人間の生、或いは人間の死の象徴のように見ることで、小説の発想を促されることがしばしばある。先ごろ「海市」という小説を書いたが、そこでは二人の男女のそれそれが持つ海のイメージがまるで違つたものであり、そして二人の間にもまた不可知であり、記憶をその底に沈めたまま、彼等の運命を先天的に決定しているからである。そして彼等は、彼等が魂の中に持つてゐる海が如何に恐ろしいかを、決して理解することは出来ないのである。

私にとって、海は常にある。潮風は心の上を吹いて遠い海の呟きを伝え、砂と貝殻とは足許に碎け、鷗は飛沫の上を舞つて悲しい声で呼ぶ。私は海の渾沌^(ロ)を愛する。原始の海のすさまじい呼び声を聞く。それと同時に、私は人間的なさまざまのことを考え、遠い祖先を偲び、妣の国を想い、妣を想う。そして私の内部のショウハウクに促されて、海を見に行く。太平洋を、日本海を、また瀬戸内海を、オホーツク海を。海には違つた風景があり、それは人の心のよう複雑であり、美しいもの醜いもののすべてを藏している。私はそこに何を見るのだろうか。恐らくは私が昔から見て来たもののすべて、人間的渾沌のすべてを、この海という自然の刻々に変る風景の中に、一つの煮つめられたエッセンスとして、眺めるのである。そして私は永遠というものが人間の手の届かぬところにあることを、冷たい水に指先を洗いながら、感じるのである。

（福永武彦『海の想い』）

【16】二重傍線部ⒶⒷの漢字の正しい読みを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問20～23】

18
Ⓐ ①おじゅく
Ⓑ ②おでい
③おしょく
④おだく
⑤おせん

- 19
Ⓐ ①こんせつ
Ⓑ ②こんだく
③こんじゃく
④こんとん
⑤こんじょく

- 17
Ⓐ ①空欄Ⓐ～Ⓑに該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。
Ⓑ ②おでい
③おしょく
④おだく
⑤おせん
Ⓒ ①こんせつ
Ⓑ ②こんだく
③こんじゃく
④こんとん
⑤こんじょく
Ⓓ ①空欄Ⓐ～Ⓑに該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。
Ⓔ ②おでい
③おしょく
④おだく
⑤おせん
Ⓕ ①こんせつ
Ⓑ ②こんだく
③こんじゃく
④こんとん
⑤こんじょく

- 18
Ⓐ ①傍線部Ⓐ～Ⓒの漢字として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。
Ⓑ ②空欄Ⓐ～Ⓑに該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。
Ⓒ ③空欄Ⓐ～Ⓑに該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問24～26】

- 19
Ⓐ ①名定
Ⓑ ②名淨
Ⓒ ③名状
Ⓓ ④名釀
Ⓔ ⑤名杖
Ⓕ ①克踏
Ⓖ ②活闘
Ⓗ ③喝倒
Ⓘ ④葛藤
Ⓛ ⑤且濤
Ⓜ ①衝迫
Ⓝ ②症迫
Ⓣ ③紹迫
Ⓤ ④省迫
Ⓛ ⑤鍾迫

- 20
Ⓐ ①落窓物語
Ⓑ ②遠野物語
Ⓒ ③今昔物語集
Ⓓ ④うつほ物語
Ⓔ ⑤宇治拾遺物語

- 21
Ⓐ ①『悲の器』
Ⓑ ②『廃市』
Ⓒ ③『死の島』
Ⓓ ④『草の花』
Ⓔ ⑤『忘却の河』

22
Ⓐ ①二重傍線部◆の作品として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。
Ⓑ ②作者・福永武彦の作品として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問27】

23
Ⓐ ①二重傍線部◆の作品として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。
Ⓑ ②作者・福永武彦の作品として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問28】

- 24
Ⓐ ①「悲の器」
Ⓑ ②「廃市」
Ⓒ ③「死の島」
Ⓓ ④「草の花」
Ⓔ ⑤「忘却の河」

25
Ⓐ ①筆者は波線部で、読者にどんな思いを伝えたかったのか。筆者の思いを、五十字で述べなさい。
Ⓑ ②【解答欄は別紙問29】